

はあらざるべきか。況んや、近來先覺者の美しき聲、漸く都鄙に遍きを、豈、至誠熱情の士に乏しからんや。唯、その機を得ざるのみ。一旦、機を得て、その力を一にするを得んか。大任を受くるの日、豈遠きにあらざるべし。吾人小なりと雖も、微なりと雖も、至誠天に通ずの言を信じ、且つ、世の至大なるものは、至微の積集なるを知る。希くは克己奮勵、己れ先づ、本然の自己に歸り、吾等が、未來の教へ子をして、正しき信念の上に立ち、至誠朴直、眞の人間たるに幾からしめば、或は、その職を恥かしむること少なきを得んか。

吾人、法華經に於ける、不惜身命の意を知らず。且つ、われらは、つゆ風流を解せざるもの、固より文をなさざれども、日夜遅々として、一步も進み得ざるに恥ぢ、且つ、將來の重任を思ひては、世にも心よわき我が身を悲しみて、諸賢の御教示を仰がんと、唯、至誠以てこれを草するなん。

斷片

M.

L.

私達は、やがて、人を教へなければならぬ。併し、私達は、人を教へる前に、まづ、ひとを知らねばならない。ひとを知る前に、まづ、自分を知らなければならぬ。自分を知る事は、やがて、ひとを知る所以である。自分を知る事もなく、自分を考へる事もなしに、どうして、ひとを知り、ひとの事を考へる事が出来やう。自分なしに、他のあり得る筈がない。

私達は、自分を知り、自分を考へた時、はじめて、ほんとうに、生活する事が出来るのではなからうか。私達が、自分と云ふ事を忘れて居る時位、たやすく言ひ、たやすく行ひ得る時はない。そして、たとへそれが、いかに美しく、いかに立派であらうとも、そこに、何ら生きた力を認める事は出来ない。

ともすれば、自分を忘れ易い私達は、その忘れた自分の爲めに、自分をうらぎられる事がまゝある。

富川長橋

(龍雲山莊十小記之一)

細田劍堂

富士河沿岳麓。群々入海。兩岸數里。不辨牛馬。稍上。鐵橋架焉。長一萬八千尺。蜿蜒如龍。草堂望之。近在目睫。長橋臥波。未雲何龍。於今知此句之妙。

駿海濤聲

(全上)

覽古亭下。駿海渺然。田子三保諸勝。百里一目。夜深人定。濤聲與松聲相和。颼颼輕輕。如琴如雷。使人發羈愁。

そう云ふ時は、實に、たよりない、かなしさ、さびしさをしみとく味はふ。

私達が、この世の中に生きてゆく以上、すべての事は、なる様にしかならない、併し、自分としては、どこまでも、そうする、といふのでなければならぬ。自分がしないで居て、なり様筈がない。もし、自分がしないでも、どうにかなると云ふ事があるとするれば、それは、きつと、だれかどうにかするからなるのである。すべての人が、どうにかなる、といつて眼をつぶつて居たら、社會の活動と云ふ活動は、ことごとく、停止するより外あるまい。

たとへ、その結果は同じであらうとも、たゞ、なる様になつたのと、自分がしてなつたとは、そこに大きな相異がある。

たゞ、なるにまかせた生活は、他人から見るとんなどによくとも、その底を流れる生命の力がない、どうして、その様な生活から、眞の満足や、安心を得る事が出来やう。常に、自分からすると云ふ、自覺をもつて生活する時、はじめて力強いよろこびを感